繪本梅花冰裂

KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
Centimetres

逐隊隨羣樂自如桃花浪暖
變形軀散如萬點流星逆聚
似三曽濯錦舒玉帶高懸知
陛見紫囊同賜憶朝除池中
有此稱三寶須備神龍攫火
珠　右明人瞿佑咏金魚詩　京山書

門へ 13
號 1503
卷 1-10

明治三九年一月二九日
水谷弓彦

山東

衆芳搖落獨暄妍占斷風情
向小園疎影橫斜水清淺暗
香浮動月黃昏霜禽欲下先
偷眼粉蝶如知合斷魂幸有
微軀可相狎不須檀板共金
尊石林和靖賦梅花詩京四

京四

和其白守其墨

京四

細屋輕輭
士有而之無則
妾子爲總子已
唐琴浦右衛門
妾藻之花
銀世界
玉乾坤
聲從竹葉傳來
香自棋枝遶至
北越葡萄嶺之雪女

月梅一樹刺繍枕

梅花
因果
如何
受處
士清
高是
後身

蜻蛉

杳杳冥冥地獄最害終害計徒
非是天人自狠總然

黒口舌蜂上而猶毒毒人
蟀中黄尾鐵鰹赤最婦心

述意

這稗史い魁罍の謳語ゝ翻案し明の小説水晶燈の説話ゝ混合して新ふ作まうけたる物語ゝなれど都て虚ふして一点の實なし然といへども忠孝貞義の事を演て勸善の一端と兇悪奸邪の戒ゝ記して懲悪の一助とせ且禍福因果善悪必報の脱ざる故ゝ示して天羅地網毫釐も漏さざる理を曉さしむこと云ゝ讀まるの児女若良心を觸動し幸て善ふ為べ狂言綺語も小補あらんといふもむ乎

皆文化三季丙寅涂月

醒醒齋京傳識

梅花氷裂總目録

卷之上冊

第一齣○始養玩金奐　第二齣○嫉女鞭姙婦
第三齣○怨魂着金奐　第四齣○遇妾婦幽霊
第五齣○笛吹雨釀災

卷之中冊

第六齣○孝児得天幸　第七齣○梅為揺錢樹
第八齣○剪徑拎雪女

卷之下冊

第九齣○嬋婦苦奇疾　第十齣○片枝枯留香

通計一十齣目録終

梅花氷裂上冊

興四兵衛物語梅花氷裂

東都　山東京傳　編述

第一齣　始養玩金奐

話説人王九十九代後光嚴帝の御宇貞治六年九月足利將軍義詮公不例ふ〻り政務を義滿公ふ譲るとゐ同年鎌倉の管領左馬頭基氏卒去あるとその子氏滿相ばぐ〻て管領職となり執事憲顕これを輔佐し関東尽く氏滿の武徳ふちびれまとゐひぬその頃ふ当りて信濃国の主護職小串次郎左衛門尉貞行の家臣ふ唐琴浦右衛門とゐふ忠心无二の侍ありけり小串の館半里ばかりをたゐれて筑摩川の辺ふ居宅をゐ〻て住けるがその妻を桟とゐひ夫婦ちゐむゐほ〻く十年あゐまつはとそひ浦右衛門いたや初老ふもとび妻い三十を越たり

とゝのゝどもゝをぞ一子ありとけるとび浦右衛門これを愁ることふく神ふ祈り仏ふ願とゝのゝどる宿世の果報ゆゑとあるにあや更ふその験なく打ちぬるその頃絶海とゝの禅僧大明ふ渡りけるが泉州堺ふ住ける武士の浪人栗野市郎左衛門とゝふ者ゝの僧ふゆゑ大明ふ行ゆゑ飯朝の特金魚両尾をたゞさんてゝゝるゆゑ日本ふ金魚のはじめ始とゝゝめの唐琴浦右衛門一年君用ゆゑ上京金魚のはじめを偶同つゝ主人小串次郎左衛門昔て珍物を好まれけるとゝゝの魚を主君ふたゝまるゝゝ必定ゝゝ玉りんとゝふひ逗留のうち家来を堺ふつゝ遣ゝめの栗野が宅をたゞゆさせそゝぐふ雌雄両尾の金魚を小判二十両ふゝゝて主君ふ進あげゝるとび奇代の美魚哉と呆して喜びゝるひゝその寝美とて浦右衛門が知てふくのぞゝゆる鎬藤四郎の刀とゝゝり水槽を

造りてゝの魚を養ゆゑひゝるふ漸ゝ子を産て数多くなりめ本草綱目ふ金魚い宋の時より始て畜者ありとあるとび唐土ふゝゝて養玩ゝるゝ已ふひゝ抱朴子ふ上洛嶽の冢嶺山ふ丹水あゝて丹魚ゝゝ出ゝとあるも金魚の種類とゝゝり華人此魚を愛ゝゝとふく陳淏子が花鏡ふその養法を録ゝて詳ゝりさて小串次郎左衛門金魚の種漸ゝふふゝけるふより汝も養ゝとゝそのゝちを口ゝちて浦右衛門ふたゆゝるとけるとび浦右衛門とれを拝領ゝ大切ふあゝめひて養ひゝるふとれもゝゝゝ子を産て数おあゝくなり魚身赤白の斑文あり尾鰭金色ふ照ゝるゝ時なゝゝ紅葉の竜田川ふちゝれてゝゝれなゝふ水潮ゝる風情あるとび玩ゝる者めでゝるゝゝりけりさて一時浦右衛門妻桟と共ふ出ゝちゝく出てゝの金魚をなゝめゝて酒ゝゝゝて心を慰め四方山の話の

つのぞみのひけるに我そなすこと法れそふるすちやう年あるべくふおぼとおもふ
いまだ一子をまうけざる子ちなして先祖の血脉を失いんぞうこと不孝の第
一なりとうれば婦の七去のうち父母ふ不順なると第一と子なきこと第二
ことを然りといへども そもそこれまで一點のあやまりなきを子なれ
のこまていへどうちうふまのびんやといひて金奥を指さし此奥いちごろ
始て唐土よりいたらし我これをもとめて主君ふさしあげいつふ雌雄
二ツの奥なれども今次第ふ子と色てはぐくふへたりいづれの小奥
とのぞむ子をあなべ子孫さかへてちぐく人の愛玩とする我已ふ初老ふ
過て子なきに比奥ふも遥ふおとるふあぐるとやう子なくて主君ふ忠
義も尽さんとぞ忠孝ともふ失ふ豈ふ是ぞと吐息してひければ機そ
ふくけるいそいそいなるあふを之妾ふ公ふと

年ひさしくつれそひまゐらせて鳳凰の鏡ふ影をちぐべ鴛鴦の被ふ
枕をよせてちぐび深しとおもふも今ふ於て一子をまうけざる妾ぐ果報
ようくつたなきをうんとつぐ我身を恨 ふと涙ぐてぞいへける
浦吉房門又のひけるに夫ふつけて そもそもと相談のうへ心を決をこれ支あり
それ餘の儀ふあらぐ子ちなそいそもそもとさとも老后の難義なる比さて
さてこれもて仏神ふ祈てさまぐ心を尽をとおもふも驗なけれバせんをぐ
色我露なりも色をむさぼる心なしとおもふも妾を色つりんとおもふ
是第一ふそなたの胸を問ざれば支なり比なり何とそふやん
とのの機のひけるに妾もそこもり左をそひをぐるなれ去うおぼ一日も早く
おぐべれ女をたぐべて色ひくへ比浦右房門いそくまぐ早速の得心満足
ありさらしなぐく妾をかるふ於ていそるの心げけ肝要之我妾とつう

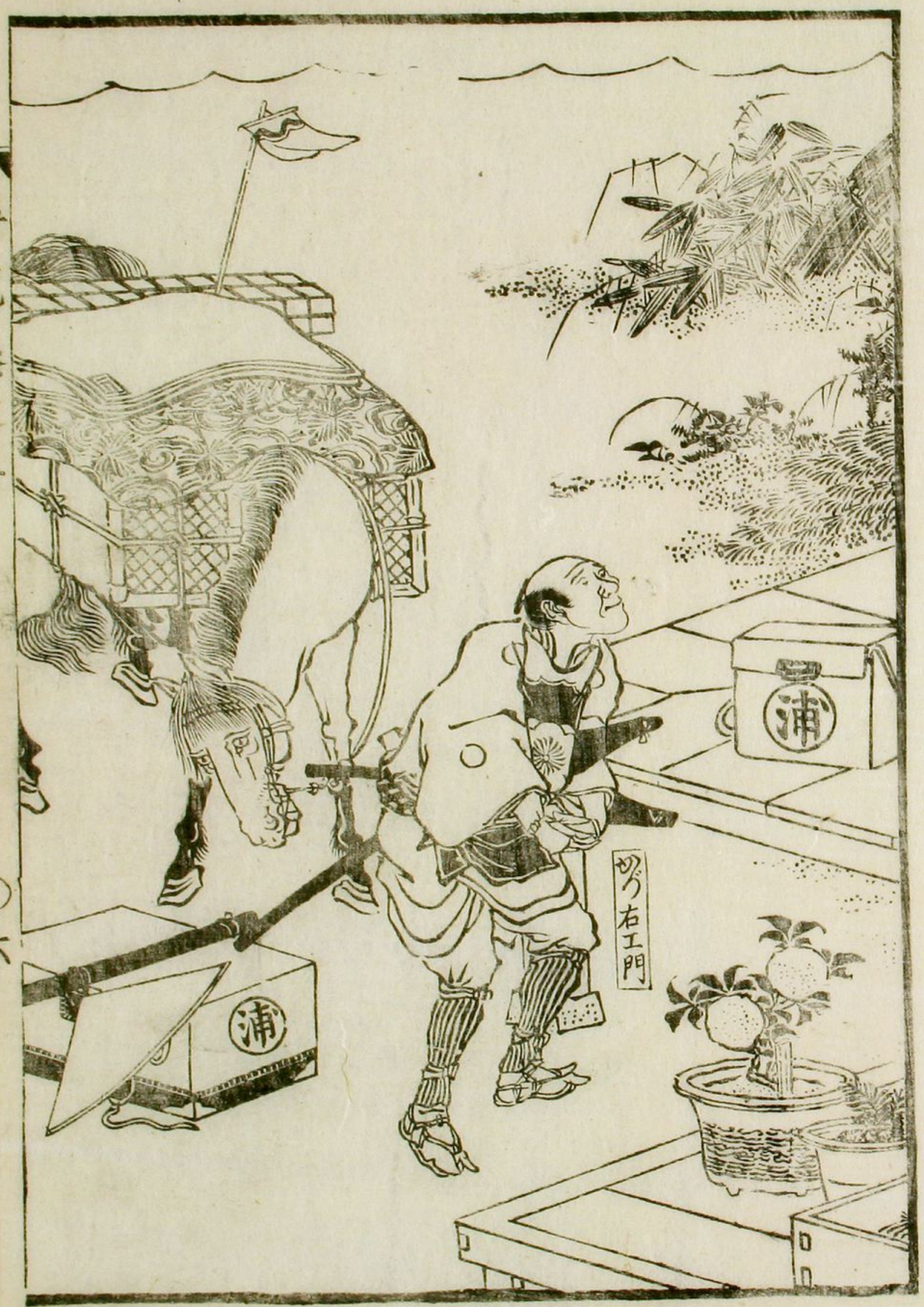
うとをそのい子をまうけん為なるをみて忠孝の道を先ふまじとふ思ふ
ものは其所をよくいさまへそふべしたりはしそちること妾の中ふ露なり
もぐろる心あるをびおのづと家内おさまるどもつゝて忠孝の道を先ふ夏
いづれもんをを世間ふまあるちゝひちをびよくく勤奔せとふ様うち
笑ひ御念のいるゝるもんまをしよくくうけたるりまぐるゝ妾は嫉妬の心も
起らんちとのもん気づひをとりあいはいるもさゝ平の心底ふはいどとふ
あぞ浦右衛門それ同て安堵あるりそて大ふ喜び又盃をあらなをそなぐく
酒どくゝ色ぬこれまり浦右衛門妾をかゝ色べふふ心を決〜をちとちをと
あるめけるがいまぐまるべ者ありそふ浦右衛門が家来ふ路鳥
杢数右衛門とふ者あて年いと已ふ六十余ていと老実ちるべ浦右衛
門つぬぐあくいるらゝ色つるひけるが一日ふ者金奥の餌ふ為ちゝる釣倒

ー
蚩をとゝん為竹の笠をかゝて手桶を提ちゝさゝ灘綱をたゝさへていて
あゝて近き下水の流れふそひて一向ふの蚩をとゝひ灘綱ふゝるとたる
苓をとりて背后の方へちげるがあやまりて往来の人の袖ふかゝること
何もるぞとひて怒ければ数右衛門笠をぬぎたゝいざる不礼ふ
ぐゝとしとつびゝよくくゝ詫ば此者い主人鎌倉在勤の節つゝそひ
四さふの地ふて交ゝる商人古手屋の三郎とふ者ちれば云ゝ
ざる對面とふふぞふの者も数右衛門ぞのちるゝふやふとひて
ちぐひふ打笠ひぬ数右衛門ぞのちるゝふやふとひて
来りるふぞとふの三郎ひけるに某国元ふそだん〜不仕合ちぐに渡
世ちりぐゝれ也ふ少ーの所縁をたゝうふ当国田川の辺ふ移り住男女
奉公人のゝうだちして〜ぐゝ炬をちるゝ色御主人ぐゝふ奉公人の角も

ゆく某がゆひつけ　ぐされしこつゝ数右衛門その詞を聞て偶心づき
は節主人妾を色かくんとたゞひらく最中なるが容貌いとゞとゞ
もあれ只志のよろしき女を迎れとのゆあれば相応の者もあゞべるゞち
たのゝかといふ三郎ゆく幸このせろ母あやのたゆふ妾奉公ゝさゝと
いふ女あり年は十七文ゆかくもちい立ふとゞもて美麗なり志も京
育の女なれべもの毎優義少てもの縫手かくこもつねゝゞど
もの読こゝもようゝとゝ氏辺の富る農夫ども黄金をもつゝべてゆー
かくんとあゞそへども行儀正しく武家ふあゝざれべつゝどとそのゝと
らゞ意ふあさゞるゝ親の為ふ身を苦めんとそふ心ゆそその為人を
推量しゆへとゝいべそいよく夏を同ぬ我主人の宅い那裡ありそこ指
さしておゝへ明日もゆくその女を同道して来ゝれゝ某い立既て主人ふ

その変説告げゆゝとたゞひふつれさりぬさて翌日ふいつゝて古手屋三郎
ゆの妾奉公人を連て浦石衛門が宅ふ来りけるとび数右衛門ゝを迎て
一間ふ通し主人ふゝと告げるあゞぞ浦右衛門立出て此女の所体をゝくふ
ゝろぎゞ黒紬ふ帯の子染の肩入ゝたる旧小袖を着てゆと貧げなる手拭
面い紅粉もわどこさゞと少しも嫌ひざる体なれども自然の美艶誠是沉
魚落雁の姿羞月閉花の形あゝて言語い京談ゆとおゝくものゝゝど
ゆとたゞらゝひたるさゞはしありげふゞゝえたりける浦右衛門心ふゝのゝ
ものやゝふ氏女さいたゝしてゝゝて自然の美をゝゝと心底奥ゆゝ計る
所あり姿の美麗ふ過たるい我意ふゆゝるゞとゆゝども親の為ふ奉公
をのゞむ孝心ゝふも不便なりとつひふ心を決し給銀のゞむゞど取

信濃国
小串の
家臣
唐琴浦
右衛門
鎌倉ふ
発足の
図
つるなし
浦右エ門
てうけものの花


浦
浦
切り右エ門

やしかへその名を藻の花とよび別ふ一間の閨房を与へて居じめけ
さて本妻桟敷と中むつまじく嫉妬の色しさ体露ざりもえざらし
けとび浦右衛門安堵のゐひを恨本妻妾の礼義を乱さどあつうひ
ろがおどろく藻の花懐胎と同日来の望みのひし夫婦ともふ
ことかぎりなく月の満るをまちひぬさて主君次郎左衛門尉貞行へ
鎌倉の管領氏満の麾下ふ属し隔年鎌倉ふ到りて勤仕せらと
けるが今年参勤の年ふあらず浦右衛門も供して鎌倉ふ赴くらて旅
よそをひをそろへく桟藻の花両人をさ家おきて別れの盃を与へまづ
桟ふ對しそのひけるい我前の日そなくふ示したる詞をよく用て藻の花
と中むつはしき夏歓喜の第一なり藻の花懐胎してもや五月ふなり殊
更ふ左り勾と同ば必定男子なるべし恙なく出生あれば日来の宿願を

らば忠孝の道を全せんことうれたびなりなるふ此度君命を是
非なく鎌倉ふ赴くなれば留主中別して心をもちひ安産あらば早速
飛脚を以て告ることびとのひそ又藻の花ふむひめそのひこさせ置
るごとく汝をめしのへたるい全く色をむさぼるふあらざ世つぎをまうう
けん為なれば度の出産い汝が役目の第一なり朝夕の起臥日こ
の食物ふのるまでよく心をつけて安産をいとことびとこ必ふ
同せければ両人口をそろへ必ずとこ色づひ色ふなるといのあご浦右
衛門あび豆胡桃尉文手昆布のひそひ有ふ盃をおさめる時ふて
ふ時計ひぶれて主君発駕の時刻ちめば家来鷺奏数右衛門を
見して門外まで出おくると出る妻ふむひ忘れたり我留主中ふの
金奥を大支ふかけとのひて別ひ出ぬ

○第二齣

嫩女 鞭 姓 婦

浦右馬門が妻桟は夫の留主をまもりて一月ばかり過けるある日隣家の飼猫金魚槽ゑ忍入て金魚を盗んで走り出るを主の留主ゑ大切の魚を奪れていのひつけなとゆひつ庭下駄を踏なしてこれをおひかけるゑ猫は垣を飛起てゆきぬ時ゑ垣の外ゑ一箇の若き男ありて手ぶくゑ小柄をとり手裏剣となして飛ゆく猫をさしとめ打とめ血のちぶくをひろさげきりて垣越ゑこちらへなげいれゑ桟どのとゆんゑ忍んこの家の盗人をそのごとく打とめぬ金魚い已ゑひ殺したるとゆんせんとゆんとそゆひける氏若人い何人ぞなれば これいこそ足利尊

氏公の執事高階師直の一族鹿目平次左衛門が一子今世をとそでうり本名をかして舊鳥蓑文太とゆふ者なり父平次左衛門い奈る観応二年師直兄弟摂州武庫川ゑ於て落命の刺こ長尾三郎左衛門が中間ともゑ打とて亡失ぬその時氏蓑文太い年四才なり情ある者の為ゑ養ひとて生立けるが安ゑなられる美男ゑて在五中将のあるうげありとゆんとも志い大ゑ暴悪の者なりゆんば所縁の者ゑ人とまされ漸こゑ零落てちこごろい当国ゑのこて浦右馬門が奥庭の垣一重隣のちゑさい旧家をもとめて住のこてり独才のそじゑて貪く薗原の木賊を刈て渡せきを畑をたて氏時已ゑ年い二十一オゑぞありけるさて桟い蓑文太がかの猫を打とめれなる意解ゝゝゆく御隣家ゑあてはゆくこれまでつひゑゑん目ゑゆくこゆぞ日ごろのうとをいゆもしまれしとのゝゆとちづしげゑゆひ

けんとび蓑文太いそくさそもくあんれの心底いとさくいそぐつの奥をれ
ども夫の留主ふ奪れそらいひつけほとの多と詞その一を以て万と
さらと　そらと　なんど　そんえん
密るふ夫を大事とあがと貞心感るふあるとありさりあぐくあんれの
大切ふるふ金奥も猫といふ盗人ありてこれを奪そのごく大切の夫を
奪　盗人あとどもあんそらそれをまりあるどやあるいさつやといふぞ
桟大ふいぶるくあんれのるふ支一つそて妾あい解くがとそいるる
ゆえどとなぐぬれば蓑文太あるくいとけとば明白ふゆどなりとそ声
をひそあれの滝の花とのいりと小磯の里の白拍子あるが浦右房門どの
鎌倉在勤の年く深くなれそるあれ分ふあるたふ妾をかゆるとるるし
万事　御家来　数右房門がるくひて鎌倉よりかの女とひたりる
なりるふかの女氏節懐胎のとあんれ分遠くど浦右房門どのとかの

女の為ふ討とて一命を失ひむりんるふ必定なりこれふよりていとてくふ
なりとふ桟それを閉て胸そぐるけるが心をまぐめようく思案して
いひるふ妾浦右房門と年ひさくつれそひその為人をくく知るふめの
かくれ生れふて色をむさぐる気性ふあるど殊更ふさばるくるの非道
をたくむべれ者ともかぐえどおそくくい夫ふ恨ある者さるあて説話を
をて夫婦のなうとさんとさる計策とるるとはいふも信ぐがれ支
なりといひば蓑文太歎息くあんれ才聰明といども夫ふうるくくれるあ
某人の説話を信ていふあるどたるる証拠ありそやとるるるる
かやくふ垣越ふそんくれるすと語くがしまば某が宅ふあんへあるとと
いふぞ桟ハ心安くるどかくるのちいされ門をひくれて立出蓑文太が
住家ハワづくふ二三十歩の所ふあるびたぐちふその宅ふ到くてえるふ

崩れかゝりたる荒屋にそなたをうめてすがゝしく体なり桟に心せきあくそのあとに証拠にとて一通の手紙をとりて出し

蓑文太おうちゐぐれ

此手紙の手跡いかにもふとのひて桟にそこをとりてひらけてみるに

疑べきもあらぬ夫の手跡にて鎌倉より藻の花が方へおくりたる密書

なりその文言に我桟をうゐくあざむけりとの日来の念願をとげたるまゝ事あらしていかにもあやぶむ我留

主中しきく桟が機嫌をとりて心をかるさせおれども安産いかゝとべし

我来春鎌国せばかりにてひ合せ通じて桟を毒殺しかの妻を本妻と

なしべ必かれにふさはしからぬやうなるゆゑ心をつけぐくしとかき其餘さまく

の密事をかきたる書簡あり桟をこれを読ていたく驚おどろきてこれ読てい

かしくよみおはりて忽面色紅に変じ拳をあぐり牙をかみ怒る眼

に涙をもりくとおとして虹のごとき息をつきてあぐくものもいはざりけり

蓑文太その体をみて小膝をたゝきいはく理をその書簡八十日

だらしさき鎌倉の飛脚藻の花が宿古手屋三郎と某が姓名旧鳥蓑

文太とを問たゞして某が宅に持来りぬ某かゝりて鎌倉に旧友あるゆゑ

人の書簡とゝひ折しも誰彼時の二薄あるゝに上昏もよるべ開封して

みるにその文言ありけるさそもく丑の中あい非道をたくむものあるかな

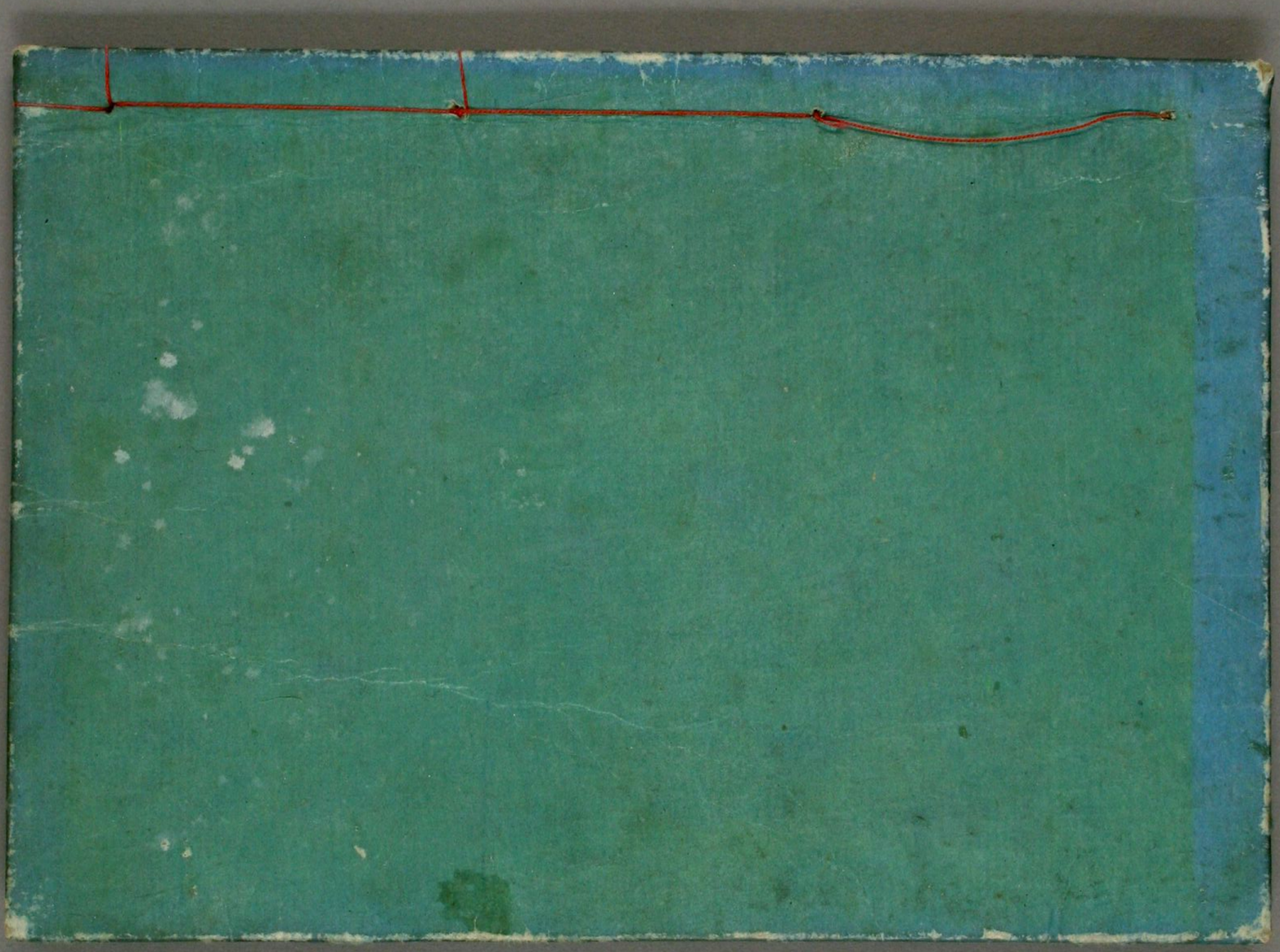
おそろしき人心やさるにても隣家の内室悪人どもの奸計に非金に

死んのうらみをいかにとそひりつゝそのの飛脚と

かゝ何とぞ弟に知らせばとて頃日時ぐかりその垣のもとに出てこれ折

もぎをと心づけ知ふけしもたゝちどもん才猫を追て出ひい誠是命

つれ所ありとかゝ桟はまもくたゝ

涙をぬぐひ今ぞひあらと

とびさるだちて夫の詞ふ子あるこへ不忠不孝なるとび子をまうける為
妾をつるふ安しも色をねたむるふあるべき必恪乱をあとのひとの
時にうべこそとりとろひつるふそれもこそ藻の花とのひ合せの計あて
あるとなう情なる夫やあくもむべ女めとのひて且怒且悲はれ才吉之を
告ぶこそとどの彼等が為ふ妻殺をせるるべ実ふはん才の命の親なり
大恩骨ふ鏤心ふ銘じて一生忘ぬとやとぶとのひて掌を合せて拜
と蓑文太その手をとりて色ひるれ君ゲ玉掌を以て拜はんとはるへ
ざるとるれはん才の命を救ゲやと頃日心を尽せのそれもづしはなるべ
某御隣家ふ移しもて以来折くそれはん才或い婢女をつれ庭ふ
出て遊ぶふ時もあるて或い夫婦つれあてはつまづく庭木をるるそ楽
ふ時もあるてひそふそれをのもそる度く初もうる度ものの